

令和二年度 学生による授業評価結果報告

令和二年度の学芸員資格課程の全授業について、例年通り、授業評価を行いました。この調査は授業における得失を明らかにし、問題点のある授業内容を積極的に改善するとともに、高評価の授業については、さらなるレベルアップを図ることを主たる目的とするものです。そのために、本講評とアンケート結果を公開しています。しかし、本年度に関しては、この主要命題とともに、もう一つの注目点がありました。言うまでもなく、コロナ禍における授業のあり方と学生の受け取り方を分析することにほかなりません。対面で行われる通常の授業から、ほぼ経験のないオンライン授業への転換が、どのような効果や弊害を生んだのか、この点に関して学生たちの生の反応を直視することです。しかし、オンライン授業といっても、その形式は教師により実に様々であり、単純に数値だけで学生の受けた印象や功罪を論断することには危険が伴うと言わざるを得ません。また、単年度の調査という点も、結論に結びつけることに拙速が伴う可能性を無視し得ないでしょう。とはいえ、このような危機的状況下で行われた授業形態として、その成果や問題点を分析することは、ある意味で恰好のチャンスともいえます。以上のような観点から、アンケート結果を前年度の数値と比較し、そこから浮かび上がる状況と学生の反応について見て行きたいと思います。

大学生、なかんずく専修大学の学芸員課程において、例年のように低調な数値が顕著な傾向の質問項目の一つに、《12.宿題・課題、予習・復習にかけた勉強量はどれくらいでしたか（一回の授業あたりの平均として）》という項目があります。令和元年の全体統計として「30分程度」と「ほとんどしなかった」と答えたのは、前期は約72パーセント、後期は約61パーセントにも上りました。ところが、令和二年前期では、「3時間以上」「2時間程度」「1時間程度」と回答したのが約53パーセント、同後期は64パーセントという数値となっています。これは、オンライン授業によって、先生方が積極的に課題を出し、それを学生たちに取り組みさせた結果と見て大きく外れるものではないでしょう。また、これと並行して、《13.積極的に発言や質問をしましたか》という項目も注目されます。令和元年度前期は、「積極的にした」「やや積極的にした」が約7パーセント、同後期は17パーセントと極めて低調です。ところが、同じの項目が令和二年度前期は約40パーセント、同後期は約38パーセントという数値を示しています。この結果から、対面授業では積極的な発言や質問をしない学生が、オンラインという授業形式では逆に果敢に授業に向き合っている姿が浮かび上がってきます。スマホなど機器を通して発信することに慣れている現在の学生気質を示しているとも推測されるでしょう。

このように予想外の収穫が見られたものの、オンライン授業ならではの、そして、学生のみならず、こうした初めての事態に直面した教員にこそ起因すると思われる結果も浮か

び上がってきました。《4.学生の感想・反応を確認しながら授業が進められていましたか》という項目について、令和元年前期は 73 パーセント、同後期は約 76 パーセントであったのに対して、令和二年前期は約 53 パーセント、同後期は 76 パーセントと微妙な数値となっています。オンラインの授業形式に不慣れなのは、学生ばかりでなく、教師も同様ということかもしれません。また、生の授業とは異なり、機材を通しての音声や画像は、機械のコンディションの状態に左右される可能性もあります。さらに、教師の表情や仕草などが、想像以上に学生の意識に働きかけている可能性を示すものと言えるでしょう。しかし、オンライン授業だからこその積極的な利点も指摘できると考えられます。《7.テキスト・配布資料・画像などは、効果的なものがしろうされていきましたか》という項目がそれです。令和元年前期では「そう思う」「ややそう思う」が約 65 パーセント、同後期は約 71 パーセントと元々高水準だったものの、それが令和二年前期は約 82 パーセント、同後期は約 91 パーセントとさらなる上昇を遂げています。オンライン授業にあたり、担当の先生方が授業内容について学生の理解を進めるために、積極的に資料や画像などを用意されて、それが功を奏したものと判断できるでしょう。

以上、令和二年度の学芸員課程の授業評価を概観しました。オンライン授業が思わぬ成果を上げている点を踏まえて、従来の対面授業に復した場合でも、こうした学生の評価を勘案して、さらなる充実した授業設計と授業運営を先生方に切にお願い申し上げます。

以上